

『法隆寺建築論』前史：明治時代初期までの法隆寺の歴史認識について

藤木 竜也

法隆寺西院伽藍は、築 1300 年を数える世界最古の木造建築群としてよく知られるが、これは伊東忠太が『法隆寺建築論』（1893 年）で初めて学術的に明らかにしたものである。この論文は「日本建築史の創始」を意味するものでもあり、大胆に換言すれば日本建築史は法隆寺あってこそ成り立ってきたとも言い得る。ここで素朴な疑問だが、数多ある社寺の中でどうして法隆寺がはじめに着目されたのだろうか。『法隆寺建築論』の緒言では、その建築が論じられていないことを述べるに留まるし、後年に「法隆寺研究の動機」（建築史研究会『建築史』所収 1940 年）で述懐するところでも「第一印象として他に比類な無き一種特異の風格を備ふる名建築であることを直感した」とあり理由としては釈然としない。

明治時代に初めて法隆寺の建築を述べた黒川真頼の「法隆寺建築説」（『国華』9-11 号所収 1890 年）で「古代建築美術の中で…(中略)… 最模範とすべき」と評され、伊東忠太も「軒ノ工合ハ今ト全ク異ナレリ五重ノ塔ハ本堂ノ傍ニアリ形甚タ巧ニシテ構造頗ル奇ナリ今一々之ヲ記セズ本堂ノ内ニ入り見レバ柱ニハ「エンタシス」アリ「カピタル」様ノ斗アリ頗ル西洋風アリ即ハチ知ルコレ印度ノ建築法ヲ直寫セシモノニシテ西洋モ元来印度ヨリ建築ヲ輸入セシカ」と日記に書き（『うきよの旅』）、上述の法隆寺の第一印象を得た帝国大学造家学科の見学旅行（1891 年 7-8 月）で、これを引率した木子清敬が見学先に選んでいることも法隆寺が当時すでに由緒ある建築として認知されていたことの証左といえ、明治時代初期には日本建築史研究の嚆矢となるべく素地があったことがわかる。

ここで時代を遡って六国史に記録される寺院を計上してみると法隆寺の記載は全体的に少なく（表 1）、南都七大寺に列せられるとはいえ、古代における寺格でもって法隆寺がはじめに扱われることの説明はし難い。これは江戸時代まで下ると様相を違えてくる。17 世紀半ばから地誌、さらに後の寺社参詣の大衆化により名所案内記が多く刊行されるよ

表 1 六国史における寺院の頻度

	日本書紀		続日本紀		日本後紀		続日本後紀		日本文徳天皇実録		日本三代実録	
	～697年	「寺」検出数 157	697年～791年 [95年]	「寺」検出数 471	792年～833年 [42年]	「寺」検出数 312	833年～850年 [18年]	「寺」検出数 232	850年～858年 [9年]	「寺」検出数 80	858年～887年 [30年]	「寺」検出数 675
1	飛鳥寺	28 [17.8%]	東大寺	62 [13.2%]	西寺	23 [7.4%]	元興寺	10 [4.3%]	東大寺	9 [11.3%]	延暦寺	46 [6.8%]
2	川原寺	10 [6.4%]	西大寺	29 [6.2%]	東大寺	15 [4.8%]	東寺	9 [3.9%]	法隆寺	5 [6.3%]	東大寺	32 [4.7%]
3	大安寺	8 [5.1%]	薬師寺	27 [5.7%]	東寺	12 [3.8%]	西寺	8 [3.4%]	興福寺	3 [3.8%]	興福寺	30 [4.4%]
4	法隆寺	4 [2.5%]	大安寺	20 [4.2%]	川原寺	6 [1.9%]	興福寺	6 [2.6%]	大興寺	3 [3.8%]	貞観寺	24 [3.6%]
5	四天王寺	4 [2.5%]	法華寺	17 [3.6%]	秋篠寺	6 [1.9%]	四天王寺	5 [2.2%]	西寺	2 [2.5%]	薬師寺	21 [3.1%]
			∴		∴		∴				∴	
			[13] 法隆寺	5 [1.1%]	[25] 法隆寺	1 [0.3%]	[9] 法隆寺	4 [1.7%]			[10] 法隆寺	12 [1.8%]

うになると、大和国でも作成された複数の地誌・名所案内記に法隆寺の記載が見出せ、その認識の移り変わりを読み取ることが出来るようになる。

『和州寺社記』（寛文年間 1661年-1673年）では、創建に関わる由緒ならびに各堂宇に安置される仏像が列記され、特に金堂や五重塔のような主要堂宇では建物規模と仏像の詳細が述べられ、これは続く『南都名所集』（1675年）や『大和名所記（和州舊跡幽考）』（1681年）などでも同様に著述されて基本形として踏襲される。例えば、『南都名所集』は『建久御巡礼記』（1192年）に依って法隆寺を7頁にまとめるが、後の地誌・名所案内記では『太子伝玉林抄』（1448年）や『伽藍本尊霊宝目録』（作成年不詳）など他史料の内容が出典を明示の上で加えられ、『廣大和名勝志』（安永年間 1772年-1780年）では68頁にまで拡充されるに及ぶ。このことは掲載絵図にもよく読み取れ、『南都名所集』では西院・東院の伽藍を問わず、金堂と五重塔とともに夢殿と西円堂と思しき堂宇を並べて象徴的に扱っているのに対して（図1）、『大和名所圖會』（1791年）では西院・東院の両伽藍を鳥観図としてそれぞれ精緻に描いており（図2）、内容・描写ともに精確さを求めていく傾向にあった。

こうした性格もあり、地誌・名所案内記では掲載対象を比較して扱ってはいないが、注目できるのは『大和名所記（和州舊跡幽考）』において、『日本書紀』にある伽藍焼失の記録のほかに「然ども寺僧乃曰法隆寺乃記録に見えず又古老乃傳もなし建立已来火災をしらずといへり」と書き（これらは後の『廣大和名勝志』でも引用されている）、後の「法隆寺再建非再建論争」を先行するような来歴に関する記述が認められることである。つまり、寺社参詣の大衆化を背景にした旅文化の隆盛という後押しにより、法隆寺西院伽藍の堂宇の建立が飛鳥時代にまで遡るといふ歴史認識が17～18世紀には広まっており、これが明治時代において他の社寺に先駆けて論究の対象となり、伊東忠太が『法隆寺建築論』を論じる素地になっていたのである。

謝辞：本稿は、轟沙也花さん（千葉工業大学創造工学部建築学科令和元年度卒業論文）の研究成果に基づくものである。ここに記して謝意を申し上げます。

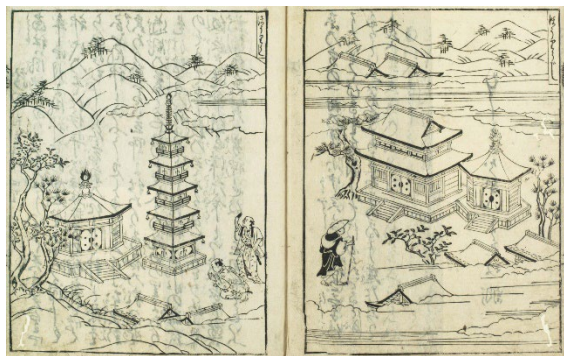


図1 『南都名所集』掲載の法隆寺

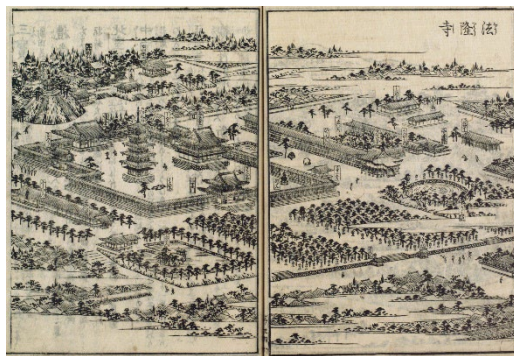


図2 『大和名所圖會』掲載の法隆寺西院伽藍
図1, 2ともに奈良県立図書館蔵